

If I were……

沖田
櫟

目の前の英語の問題集に載っている問題にはこう書いてある。

問1、括弧に入る単語はなんでしょう。

If I () bird, I could fly to you.

……全く持って意味が分からん。

放課後、図書室から窓の外を見ると手袋やマフラーをし、帰っている生徒がたくさんいる。その中には最近付き合ひ始めたと噂の隣のクラスの大畑と天野さんがいた。あの噂は本当らしい。まあ、人の恋路はどうでもいいのだが。

もうすぐテストや受験だというわけでもないのに、放課後ほぼ毎日私、安川胡桃は毎日図書室で勉強をしている。

決して自分自身が図書委員と言うわけでもなく、ましてや好きな人が図書委員というわけでもない。

どこかふんわりと優しい感じのした図書室の空気が好きで、此処に居座っていたいがために勉強をしている。

本を読めばいいというかもしれないが、此処に入っている本は殆ど読み尽くしまい、あと読んでいないのは辞書と図鑑くらいだ。

今日の図書室内は特に静かだ。

普段でもそこまで人はいないが、今日は月に一度の図書委員の休日ということもあり、誰も来ていない。

図書室を独り占めという優越感に浸っていたところだが、それはただの時間の無駄なので問題に戻ることにしよう。

If I () bird, I could fly to you.

決して日本語訳が分からないでも、答えが分からないわけでもない。問題はそこではない。

「意味わからん……」

そんな安川の独り言は夕焼けに照らされた図書室の中で浮かんで消える

——— ハズだった。

「どうしたの？」

「どうやら私以外にも人が居たらしい。ふと顔を見上げると、

「ああ、王子か……」

「ああ、って反応はないでしょ、胡桃ちゃん」

「というか王子って呼ぶのやめない？」

と言いながら困ったように笑う。

家里隼人。我が高校の【王子様】である。故に私は王子と呼ぶ。

自然なキャラメルブラウンに流れようにしなやか髪。ぱっちり二重にキリツとした瞳。

剣道部で運動神経抜群。それだけでなく常に学年順位5位以内をキープするほど成績優秀。

品行方正、冷静沈着、才色兼備。そんな絵に描いたような彼は男女生徒、先生問わずに人気。完璧、という言葉は彼の為に存在しているのだろう。

そんなこと考えていたら、また家里が話しかけてきた。

「で、学年2位の胡桃ちゃんでも分からない問題って何？」

これ、と参考書に描かれた先程から気になっている問題を指差す。

「……仮定法過去でしょ？ 日本語訳が【もし私が鳥ならば、私はあなたの元へ飛んでいきたい】で……」

「文型も文法も意味も単語も分かっている。答えは were だ」

淡々と答える安川にじゃあ、何で？と怪訝そうな表情で彼女の方を見ながらそういった。

なんか根本的に考えていることが間違っているような気がしてきた……。

しかし家里は何でもない、と言ったところで納得するような奴ではない。

ほぼ諦めモードで「……笑わないか？」と聞くと、「内容による」在り来りな回答が返ってきた。

そんな彼から視線を外し「もう、いい」と言うと、心底楽しそうな表情で「分かった、笑わないよ」と言ってきた。

やはりこうなってしまうのだ。安川は自分の考えを口にした。

「……文章の文学的な意味。【鳥になって飛んでいきたい】人の気持ち分からない」

これを聞いた家里は豆鉄砲を食らったような顔をした後、ゆるゆると表情を緩め、ついには爆笑し始めた。結局笑うのか……！

「ははは！ いや、はは、流石。胡桃ちゃんは観点が普通の人と違うよね」

「……褒めているの？ 貶しているの？」

「全力で褒めているよ」

「……うさんくさい」

そういえば初めて話した会話もこんな感じだった。

高校2年になって初めての席替え。

私のクラスはくじで席を決定する。何も考えず、引いてみると6番だった。

「胡桃は何処の席？」

「6番。窓側、前から2番目。黒板も見える。悪くない」

「はは、流石真面目っこ胡桃」

クラス中が席の話に盛り上がりながら、指定された席に座る。

右隣を見ると、綺麗な少年。——噂の王子様か。

まあ、挨拶くらいはしておこう、と思ったその時。

「ねえ、牛乳のミルク割りってどう思う？」

「は、」

そう私の方を向いて言った。牛乳のミルク割り？ それって…

「ただの牛乳だろ」

と吐き捨てるように言うと、心底驚いた顔をし、次の瞬間には声を殺して笑い始めた。

普通の感想を述べただけだが何でこいつは笑っているのか、私には理解不能だった。

そんな考えはまるで関係ないかのように「ははは、確かに。そうだよ。よろしく胡桃ちゃん？」
と言いつつ放った。

……全く余計なことを思い出してしまった。

「はあ、と溜息をつき「もう、いい」というと、「ごめん、ごめん」と言いながら、例えばさ、と家里は続けた。

「胡桃ちゃんに大好きな人が居たとするでしょ？その彼が風邪を引きました、つてなったらどうする？」

「……看病しに行くんじゃないか？」

「でしょ？でも自分はその人の家の近くではない、となると？」

「……鳥になって飛んでいきたいって？」

「走るよりは相当速いだろうね。僕なら飛んでいきたいな」

へえ、と感嘆の声をあげる。そういう考え方もあるのか。なるほど。

「違う価値観が知れて勉強になった。助かった」と言うと、

「どういたしましてー、と言いながら家里は私の向かい側の椅子に座った。

「そういうえば王子、図書室に何の用だ？今日は貸出出来ないぞ」

「知ってる。誰も居ないからちよっと覗こうと思っただけ。図書室の雰囲気、結構好きだから」
「そうか、と返事をしたが、頬は完全に緩んでいる気がする。自分の他にも同じ考えの人間居るって嬉しいものなんだな。」

自分の中の新たな感情に感動していたら不意に「ちよっと図鑑取ってくる」と言つて家里が席を立った。

図鑑を読むということは居座る気満々というわけか。と、一人納得して再び問題を解き始めた。

暫くするとカタン、と椅子を動かす音がしたので、顔をあげると家里は本当に図鑑を持ってきていた。

「何の図鑑だ？」と興味本位に聞いてみるとタイトルを前に出して、トンと置かれた。読めというとか。

示唆されるまま視線を図鑑へ向ける。

タイトルは『日本明治文豪図鑑―常識から裏側まで―』だ。なんでこれを図鑑にしたんだ。

「何がしたいんだ、王子」

「たまには文豪について勉強してみるのも悪くないかな、と思つて」と楽しそうに言う。

「絶妙な凶鑑を選んだな」

でしょ？ と椅子に腰を掛けながら得意げな顔で家里は答えた。……嫌味のつもりだったのだが。

「僕は適当に凶鑑読んでいるから、胡桃ちゃんは問題に集中しなよ」

「氣遣いに感謝する」

こういう優しさがあるから王子と呼ばれるのだろうか、安川は考えながらお言葉に甘えて最後の記述問題へと手を付けた。

電子辞書の音とペンの音。ペラリ、という本の音しかしない。窓の外には下校する生徒の姿も見受けられないし、廊下にも人の声がしない。

どこかこの世界に私と家里だけが取り残されたような感覚さえしてしまう。

チラリと王子の方を見れば真剣に凶鑑を眺めている。夕焼けが家里の表情を淡く照らしており、いつもより綺麗に見える。なんかの少女漫画の一面みたいだ。

こんなことを考えてしまう辺り雑念だらけだ。これではいつまでも上手い英文和訳が見つからない。少し頭のリフレッシュをしよう。そう思い息抜きをする体制に入る。

ふと先ほどのやりとりを思い出す。

「……鳥になって飛んでいきたいって？」

「走るよりは相当速いだろうね。僕なら飛んでいきたいな」

「……王子」

そう呼びかけると家里は「ん？何？」と言いながら顔をあげた。

「王子は鳥になって飛んでいきたい奴でもいるのか？」

先ほどの言葉を言った時の優しげな表情が気になったので、そう聞いてみたが、家里は少し困った顔をした。

「んー」と言いながら凶鑑を見ながら、すぐに何かを思いついたようにこう言った。

「……先に僕の質問に答えてもらってもいい？ それから答えるよ」

「交換条件というわけか。構わない」

王子の恋愛事情。少し、いや大分気になるところだ。……私はこんなに噂好きだったか？心なしか感情が高ぶっているような気がする。

「じゃあ、……Ms.Yasukawa, The moon is beautiful, isn't it?」

「はー」

まさか英語で質問をされると思わなかっただろう安川は凄く驚いた。

取りあえず質問に答えるべく窓を眺めてみる。太陽が沈み、空が紅く染まっただけで凄く綺麗だが、残念ながら月は見えない。

おそらくこの窓からこの時間に月を見るのは無理だ。

返答に困り、黙っていると家里は私の考えを読み取ったかのように

「そんなつもりじゃないよ。……胡桃ちゃんなら分かるって信じている」と言い放つ。

私なら分かる？ どういうことだ。しかも信じられても困る。だがそれでもなるべく期待に答えたい。そう思い、思考を集中させることにした。

和訳するならば【月が綺麗ですよね】と言ったところだろうか。

月が見えないのにそんなことを言われても、何て返すべきか。

「胡桃ちゃんは『三四郎』や『それから』や『門』って読んだことないの？」

「いや、夏目漱石の初期三部作は読んだことある。だが【月が綺麗ですよね】という一文との関連性は見いだせない」

「流石、胡桃ちゃん。でもどちらかという【月が綺麗ですね】って訳してもらった方がいいかな」

「は？」

月が綺麗ですね、三四郎、それから、門、夏目漱石三部作。これらに何の関連性が？ ……？
ますます分からなくなってきた。

取りあえず基本情報を整理しよう。夏目漱石。2月生まれ。小説家。評論家。英文学者。本名は金之助。吾輩は猫である。江戸出身。帝国大学出身。英国留学。——英語教師。月が綺麗ですね。もしかしてという可能性を思いついた。いや、思いついてしまった。

その瞬間、急に全身に血が廻った感覚がした。

おそらく紅くなっているであろう頬をすぐさま手で隠して、ちらりと家里を見ると満足そうに微笑んだ。

夏目漱石がかつて英語教師時代に生徒に教えたと言われている都市伝説。

愛よりも情を重んじ、直接的な表現を無粋だと考えた時代に生み出された奇跡的な和訳。

こんな変化球を投げてるなんて反則だ。

「答えは今週中に僕の所へ来て言うことってことで」

と家里はあっさりと言げる。そして私があっけにとられている間に席を立ち、本を元の棚に戻し、出入り口へと足を進める。

ふと足を止め、思い出したようにこちらを向いて、にこりと笑い、

「さっきの質問の答え、…：僕は胡桃ちゃんのそばに飛んでいきたいよ」

「！」

家里は微笑んでじゃあね、と手を振りながら図書室を去っていく。

——わざわざ戸を開けて。

せっかく石橋を叩いて渡ったのに、後方から猛スピードでその橋を渡られた、そんな位脱力感を感じる。その質問の答えは私が答えてから答えるんじゃないのか。

せっかくあの回りくどい情緒あふれる表現を使った意味が全くない。

あの王子は私の心を掻き乱せば気が済むのだろうか。

悔しさより嬉しさが勝っているのが自分で分かるのが尚更負けた気がする。

情緒あふれるひねくれた英文を頂いたのだから、こちらも同じように返さねば。

そして——あの余裕を崩してやる。

そう思い、まだ終わっていない課題は家に帰ってやることを決め、急いで荷物を片付け、未だ廊下を歩いているであろう家里の後を追った。

図書室を出る直前に文庫コーナーで見かけた、二葉亭四迷の言葉をお借りして

「I would like to pass away for you.」

——「死んでもいいわ」と伝えるために。